◆循環器内科

院　長　庄野弘幸

【1.体制】

循環器内科は、2022年度もスタッフの増加はなく、院長の私だけの体制であった。

このため、心不全などの循環器疾患患者を他の診療科の医師へ依頼した。

さらに当院でも新型コロナウイルス感染症の影響で、病棟閉鎖、救急外来の受け入れ中止を余儀なくされ、入院患者数が著明に減少した。循環器疾患の患者も全体的に減少している。

【2.取組内容と実績】

2022年度は、前年度よりさらに新型コロナウイルスの感染拡大の影響が強く、病棟閉鎖、救急外来の受け入れを中止したため、救急患者が著明に減少した。

1．入院

入院患者のデータは、循環器疾患の患者のみにしぼっての報告となる。

循環器疾患患者の入院数は66名（CPA例は除く）。平均年齢が83±10歳（中央値は86歳）で、この数年とほぼ同じであった。

このうち死亡患者は８名12%で前年と同様であった。死亡患者は、前年同様、すべて後期高齢者であった。死亡患者の死因の内訳では、心不全と考えられる方が６例と最も多く、下肢の壊死１例、心原性ショック1例であった。

循環器入院66例の疾患別内訳は、心不全が最も多く、41名であった。心不全症例の平均年齢は85歳であった。

心筋梗塞の入院は2名であった。急性期治療の目的で熊本市内の急性期病院へ転送となった急性心筋梗塞の患者が11名であった。なお、CPAOAの患者さんで虚血性心疾患を強く疑われる内因性心臓死の方が13名おられた。

急性大動脈解離は、CPA1名、入院1名であった。

全体の患者数は著明に減少しているが、急性心筋梗塞やCPAの症例数は例年と殆ど変化がなかった。

その他の入院では不整脈に関連した患者が4名（他に救急外来から搬送した症例が3名）、血管疾患が５名であった。

（表1）入院患者さんの疾患内訳　（例）

急性心筋梗塞（転送を含む）	13
急性大動脈解離（CPAを含む）	2
心不全	41
不整脈	4
狭心症、OMI	4
血管疾患	4
弁膜症（心不全合併を再掲）	4

2．外来

外来では、2022年度も済生会熊本病院心臓血管外科から応援をいただいた。

循環器内科の外来患者は毎月約800人程度であり、前年度より減少傾向であった。

ペースメーカーチェックを行っている患者は60数名であった。

通院が困難な患者に対しての訪問診療、巡回診療（一部はオンライン診療）も実施。

循環器関連の検査は、新型コロナウイルスのクラスター発生などで2021年度よりほぼ全ての検査が減少した。トレッドミル：19件、ホルター：112件、心エコー：1123件、負荷心エコー：2件、ABI：66件、下肢血管エコー：197件、頚部血管エコー：112件、ヘッドアップティルトテストが155件であった。

（表2）　（例）

	2021年度	2022年度
心エコー	1,298	1,123
ヘッドアップティルト試験	174	155
トレッドミル	29	19
ホルター	154	112
頚部血管エコー	166	112
下肢血管エコー	205	197
ABI	123	66
心臓CT	13	11
血管CT＆,MRI	104	102

【3.今後の課題】

2023年4月から、これまで済生会熊本病院に在籍していた田中靖章先生が、循環器部長として着任予定。専門分野の不整脈治療を中心に、高齢者に多い心不全などの治療にも力を注いでくれることを期待する。